



古典芸能研究センターからの お知らせ



研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」発足

神戸女子大学古典芸能研究センターの研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」が、文部科学省平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択されました。古典芸能研究センターを研究拠点として、研究代表者 大谷 節子教授（古典芸能研究センター兼任研究員・文学部教授）のもと、センターの兼任研究員・客員研究員・非常勤研究員を中心に、中世芸能・近世芸能・民俗芸能について5ヶ年の研究を計画し実施します。

本学が位置する兵庫（摂津・播磨）は民俗芸能の宝庫であり、様ざまな芸能の源を考える上で重要な地です。こうした立地条件に加え、本学は日本有数の古典芸能関係の貴重な資料群を所蔵

しています。この研究プロジェクトでは、本学がもつこれらの資産をいかした研究拠点づくりを目指しています。今後は、所蔵資料の公開のほか、研究会や講演会・シンポジウムの開催、刊行物の発行などに積極的に取り組みます。詳しい情報は、古典芸能研究センターホームページ(<http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/>)で随時公開します。

なお、古典芸能研究センターは、この事業の一環で施設を改修することとなりました。平成26年4月にリニューアルオープン予定です。

*平成26年1月より3月末まで閉室します。

古典芸能研究センターの看板完成

古典芸能研究センターは、開設以来十有余年、改まった標識を施設内に掲げる機会なく今日に至っていましたが、このたび、縁あって真新しい看板を調製しました。

木目鮮やかな樺の一枚板に刻まれた「神戸女子大学古典芸能研究センター」の文字は、本学名誉教授 信多純一先生がセンターの研究紀要の創刊に際してご揮毫くださった題字からいただいたものです。また、製作にあたっては、平成22年度に、センターがそれまでの功績を認められて学園の教職員表彰「行吉賞」を受賞した際の褒賞金を充当させ、永くその記念とすることにしました。

平成24年11月19日(月)には関係者が集い、この日初日を迎えた「神戸女子大学古典芸能研究センター稀書展示～伊藤正義文庫・志水文庫を中心に～」の展示室を会場として、展示のオープニングと併せ、この看板の除幕を行いました。現在ご療養中の信多先生は奥様と一緒にお

越しくださり、初代センター長故伊藤 正義先生の奥様もご臨席いただく中、行吉 誠之理事長・波田 重熙学長(当時)・阪口 弘之センター長(当時)と共に、看板を覆う幕に繋がる紅白の綱を力強く引いて寿いでいただきました。写真は、新調した看板と除幕の様子です。関係者のご承諾を得て掲載させていただきました。

この看板は、来春、リニューアルしたセンターに掲げる予定です。



平成25年第3回常設展「語りの文化」



場所:古典芸能研究センター閲覧室内 期間:平成25年9月9日(月)～11月18日(月)

平成25年第3回常設展は、同時期に開講したオープンカレッジ特別講座「語り文化と日本人」の関連企画として、芸能の語りに焦点をあてて、語りの場を描いた絵画や現代の上演写真などを使ったパネル展示を行いました。あわせて、説経節や浄瑠璃の正本、能の語り用の台本といったテキスト類も紹介しました。また、古代から現代にわたる語り文化と日本人との関わりについて、それぞれの講師が独自の視点で解説する特別講座にあわせて、各回の講師の著書や推薦書を見学者が直接手にとれるコーナーも設けました。会期中は、講座前後の予習・復習のために訪れる熱心な受講生や、閲覧を兼ねた学生の見学などで賑わいました。

科学研究費助成事業に採択された研究紹介

「能・狂言面の創出と派生に関する学際的研究」基盤研究(B)

研究期間:平成23～26年度

神戸女子大学文学部 日本語日本文学科 大谷 節子教授



大学院講義風景

本研究は、国内外に所蔵される能・狂言面を網羅的に調査し、面の表裏に記される銘文、印鈔、所蔵印、極め書きなどの文字データを採取することによって、客観的の年代情報をデータベース化し、年代基準面を手掛かりに、文献学、芸能史・美術史学・文化財保存修復科学などの複眼的視点から能・狂言面の創出と派生の過程を跡付け、能・狂言の作品、及びその享受史との関わりを明らかにすることを目指しています。

能・狂言面研究は、能・狂言研究の重要な一角であるにも関わらず、中世文学・中世史・芸能史・美術史など複数の分野に亘る研究テーマであることに加え、所蔵が個人や地方の寺社であるために調査に制約が伴うことが障害となり、体系的な研究

が行われてこなかった分野です。

文献学を専門とする私は、この研究において芸能史、日本美術史、文化財保存修復科学、情報学、面作修復の専門家を交えての研究組織を組み、従来の目視調査に加え、赤外線カメラを用いて漆下の墨書を判読し、製作技法・修理痕跡ならびに木地、下地、顔料などの材質に関する科学的なデータを収集しています。顕微鏡観察、三次元形状計測、X線ラジオグラフィ、X線CT、赤外線リフレクトグラフィ、蛍光X線元素分析、X線回折分析、レーザーラマン分光分析、可視分光分析、赤外分光分析などの調査をも併用する、文理融合型の研究です。

なお、海外に流出した能・狂言面は、美術館や博物館において面の名称や時代、作者が不明なまま、あるいは誤認されたまま、死蔵されているケースも少なくありません。海外に所蔵されている能・狂言面の調査を通じて、国際交流が進められればと願っています。



大学院講義風景

科学研究費助成事業とは

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金/科学研究費補助金)は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」(研究者の自由な発想に基づく研究)を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」です。ピア・レビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成が行われています。

大学院情報(論文の概要)

平成24年度博士学位取得者 博士論文概要

平成25年3月18日(月)田原 彩氏に博士(食物栄養学)、石井 与子氏に博士(生活造形学)の学位が授与されました。

田原 彩(神戸女子大学大学院家政学研究科 食物栄養学専攻へ提出 指導教員:瀬口 正晴教授)

<課程博士> 論文題目:「Application of Cellulose Granule as Food Materials in Bread-Making, and Its New Health-Promoting Functions」(製パンへのセルロース粒の利用と新しい機能導入の可能性)

セルロースは体内で消化吸収されず、低カロリー食品材料として、あるいは食物繊維源として食品に用いられることが期待されています。本研究では、セルロースの非消化性を利用した低カロリーパンの開発や、低カロリーパンとして摂取されたセルロースをさらに有効活用するため、セルロースへの機能性付与に関する研究を行ってきました。その結果、セルロースを粒子状にし、これを炭化することで好ましい製パン性を有する食物繊維の多い、カロリーの低いパンの製造ができること、同時に人の健康に影響を及ぼす食用タール色素の除去という健康保持に貢献する機能をもつパン製造のできる可能性が見出されました。この研究を通して得た、食品材料が本来もつ特性を生かしたままさらに他の機能を与えるという考え方は、今後の食品開発においても利用できるものと考えています。

石井 与子(神戸女子大学大学院家政学研究科 生活造形学専攻へ提出 指導教員:平田 耕造教授)

<論文博士> 論文題目:「環境温・湿度変化から見た吸湿性の異なる肌着着用時の温熱生理反応と衣服気候に関する研究」

本研究は、吸湿性の異なる肌着着用が発汗開始前後の温熱生理反応と衣服気候に及ぼす影響を解明するため、被験者実験と文献による比較検討を行いました。その結果、吸湿性の2%高い肌着着用時の温熱生理反応と衣服気候は、発汗開始前の不感蒸散期には皮膚からの気化を促進する効果が低湿および高湿の両湿度条件で認められました。一方、発汗開始後の温熱生理反応と衣服気候を増大させる取着熱の効果は、低湿環境では認められましたが高湿環境では認められませんでした。また、温熱生理反応を増大させる取着熱の効果は発汗レベルが比較的少量である場合に限定されることも明らかになりました。したがって吸湿性の異なる肌着着用時の快適性には、環境湿度と発汗の有無および発汗レベルが温熱生理反応と衣服気候に影響を及ぼす重要な因子であることが判明しました。

研究室便り 考古学の専門知識や学芸員資格を生かして活躍

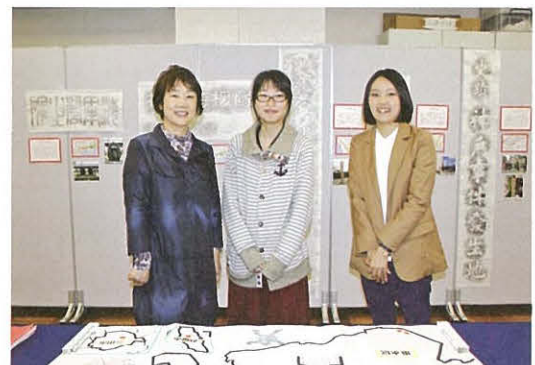
神戸女子大学大学院文学研究科 日本史学専攻 博士前期課程に在籍中の大学院生2名(井上 知花さんと三澤 朋未さん)が、平成25年10月1日付で資料館と教育委員会に採用され、大学院で培った知識と学芸員の資格を生かして活躍しています。

二人は高校生のときから古代遺跡に興味があり、神戸女子大学の文学部史学科に入学しました。学部生の時に、寺沢 知子教授の「日本考古学」の授業を受けて、物質資料を元に歴史を研究する考古学という学問に惹かれ、さらに深く勉強したいと思うようになり、大学院に進み同教授の下で研究を続けることを決めました。

井上さんは、学部生の時に、授業で訪れた兵庫県立考古博物館で、来館者に歴史への興味を喚起させるように工夫した展示方法に感銘を受け、学芸員になりたいと強く思いました。願いがかなって現在は尼崎市の資料館で考古資料の整理や展示会の企画、小学生対象の体験学習の指導などで活躍しています。

三澤さんも学部生の時に受講した「考古学実習」で発掘調査について勉強し、実際に遺跡を発掘してみたいと思いました。寺沢教授を通して発掘調査のアルバイトをさせてもらい、そこで出土品を手にもすることができました。歴史を検証しその発信ができる発掘調査を続けていくうち、この仕事にますます惹かれ、現在は教育委員会の文化財課の職員として、発掘調査や資料の整理に多忙な日々を送っています。

二人は大学院で、興味や疑問に思ったことを探求し、専門的な知識を深めたことが役立ち、念願の学芸員や遺跡発掘調査の仕事に就くことができました。今後も研究を続けて歴史を勉強する面白さを多くの人々に伝え、自らも新たな歴史の発見ができるように努力を続けていく覚悟をしています。



学園祭の博物館実習の展示室にて。
寺沢知子教授と三澤朋未さんと井上知花さん(左から)

日本語日本文学科 古典芸能コース「古典芸能講読」の特別講義で「筑紫舞」を鑑賞

神戸女子大学文学部 日本語日本文学科の古典芸能コース(注1)「古典芸能講読Ⅱ」(担当:河田 千代乃教授)の授業では、古典芸能の演者を招き実演を鑑賞する特別講義の時間が設けられています。

平成25年11月19日(火)に、須磨キャンパス体育文化ホールにおいて傀儡子族が伝えたと言われる芸能「筑紫舞」(注2)を神戸神事芸能研究会の伝承者の皆様に披露していただき、「古典芸能講読Ⅱ」の受講生と希望した日本語日本文学科の学生75名が鑑賞しました。

演舞次第

(1) 神事 (2) 巫子舞「橘」^{きねまい}「七夕」 (3) 神舞「秋風の辞」^{かんまい} (4) 傀儡子舞「オランダ万才」^{くぐつまい}



橘



七夕



秋風の辞



オランダ万才

筑紫舞は、神前で舞われる芸能であることから、室内には神座が設けられ、最初に神主さんに御祓いをしていただき、出席者全員がすがすがしい気持ちで授業に臨みました。

河田教授は演舞ごとに解説を行い、出席者は清楚でありながら華やかな衣装を纏った二人の演者による息のあった巫女舞、きらびやかな狩衣で毅然とした動きや力強い足踏みが印象的な神舞、二人の演者の軽妙な身振りもあり、見た目も楽しい傀儡子舞を鑑賞しました。厳かで優美な舞でありながら、旋回、跳躍、足踏みといった現行の日本舞踊にはない身振りや足使いがある舞に、学生は一瞬たりとも目が離せない様子で熱心に見入っていました。さすらいの芸能者たちが地域に伝えていく過程で、様々な舞ぶりが加わっていった永い歳月に学生たちは思いを馳せ、人々の暮らしの中で神事と芸能が一体となって受け継がれてきたことや日本の文化や芸能の奥深さを学びました。

(注1)日本語日本文学科では、学生の多様な興味・関心に応じるために、2年次からはコース制(日本文学・古典芸能・日本語)を設けている。コース内には、入門・講読・文学史や日本語史・特講の科目が開講されている。コースの科目を中心に幅広い学習ができるよう他のコースの科目も履修できる。

(注2)かつて「くぐつ」(傀儡・傀儡子)と呼ばれ、定住せずに「祓え」の芸をすることで暮らしを立てる芸能集団がいた。この集団が守り伝えてきた神事芸能が「筑紫舞」である。



河田千代乃教授

舞の解説を行う河田教授

国際交流

交流年表

(姉妹提携等)

1983年	ハワイ大学(米国)	2007年	チェンドラワシ大学(インドネシア)
1993年	ケント大学(英国)	2010年	ウダヤナ大学(インドネシア)
1997年	フライブルク大学(独国)	2010年	西安工程大学(中国)
2000年	華南師範大学(中国)	2010年	カセサート大学(タイ)
2006年	ガジヤマダ大学(インドネシア)	2010年	高麗大学(韓国)
2006年	オークランド工科大学(ニュージーランド)	2011年	チェンマイ大学(タイ)
2006年	ピッツァー大学(米国)	2011年	カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校(米国)
		2012年	アイルランガ大学(インドネシア)

健康福祉学部 国際健康福祉プログラム紹介

国際健康福祉プログラムは、健康を運動、栄養、社会福祉との関わりで捉え、世界の健康と医療の現状における問題を知り、国際感覚を身につけて世界で活躍できる人材を育成することを目的に、2013年度から開講されました。かねてから、インドネシア共和国とドイツ連邦共和国で行っていた教員と学生の共同調査研究や研修をさらに充実した内容で国際健康福祉プログラムを実施しています。

国際健康福祉プログラムⅠ (担当:梶原 苗美教授、松本 衣代助教、山下 俊介教授、野口 和美准教授)



女子高生の貧血健診

2013年8月23日から9日間、健康福祉学部 健康スポーツ栄養学科3年生4名と4年生3名、社会福祉学科2年生2名の合計9名がインドネシア共和国バリ州(バリ島)において実施された国際健康福祉プログラムⅠに参加し、現地の医療・栄養の現状を学び、文化に触れインドネシア国立ウダヤナ大学医学部在学学生との交流も深めました。

2010年に神戸女子大学とウダヤナ大学は、学術交流協定を結び、梶原 苗美教授が中心となって学生の交流を進めてきました。

学生たちは、急激な発展途上にあり栄養摂取の過剰と不足という健康問題の二極化に直面するインドネシア・バリ島の現状を学ぶため地域の保健所、病院、各福祉施設などでフィールドワークを行い理解を深めました。民家も訪れ、伝統を大切にしている大家族で暮らしている現地の人々の生活を見て現状を知るとともに、インドネシアの人々のおだやかな人柄に触れ、学んでいる専門的知識を深めて人々の役に立ちたいという気持ちが強くなりました。また、国際的なコミュニケーション能力の向上を目指す意欲が沸きました。



妊婦体操教室(バリ第4保健所)

国際健康福祉プログラムⅡ (担当:梶原 苗美教授、松本 衣代助教、奥野 直教授、山下 俊介教授、狩野 恭教授)

2013年9月6日から16日の間に健康福祉学部 健康スポーツ栄養学科の4年生4名がドイツ連邦共和国バーデン=ヴュルテンベルク州のホーエン・フロイデンシュタット病院において実施された国際健康福祉プログラムⅡに参加し、海外における臨床栄養を学び、医療関係者や患者さんとの国際交流も行いました。

ドイツでの病院の臨床栄養研修は、EU諸国においても進行している超高齢化社会の生活習慣病の現状と治療方法を学ぶために7年前から梶原 苗美教授の主導で始まり、3年前から食事療法、運動療法を効果的に取り入れている同病院で研修を行っています。

研修では、栄養士が医師の診察に立ち会い治療に関わっている様子と治療にスポーツを取り入れて、栄養摂取のバランスをとることにより成果を上げている実態を見て、学生たちは医療制度の違いや栄養士の業務範囲の広さに関心

をもちました。また、ドイツの生活様式や文化に触れ有意義な日々を過ごしました。

出発前から学生たちは、日本料理の食事会を現地で開く計画を立てていました。食材を持参し、70人分のちらし寿司やてんぷらなどを調理しました。大変な作業でしたが、「とてもおいしい」と患者さんと病院スタッフの方にお褒めの言葉を頂き、日本食を紹介し国際交流ができたことに、研修に参加した意義を改めて認識しました。

卒業後の進む道は様々ですが、ドイツの病院における治療方法と栄養士の在り方を今後の進路に役立てるつもりです。



学生の作った日本食(かき揚げとちらし寿司)



運動療法(アクアエクササイズ)



ホーエン・フロイデンシュタット病院の栄養士による栄養指導の説明



ハーブの効用の説明(ハーブ菜園にて)

オックスブリッジ英語サマースクール2013

オックスフォード大学及びケンブリッジ大学の学生が組織するOxbridge Summer Camps Abroad (OSCA) の学生2名を講師としたオックスブリッジ英語サマースクールが2013年7月23日(火)から8月2日(金)の間に須磨キャンパスで実施されました。今年にはケンブリッジ大学からウィル・テイラー (Will Taylor)さんとオックスフォード大学からリサ・ケイブ (Lisa Cave)さんを迎え、神戸女子大学の学生25名が参加しました。

授業は全て英語で行われ、2名の講師は日常生活に根ざした同世代の学生が興味をもつ内容を取り入れた授業を行いました。学生はグループに分かれて、英語で本学での大学生活や日本の文化について講師に紹介する時間も設けました。

学生実行委員が企画したウェルカムバーベキューパーティー、京都観光などのイベントが取り入れられ、英語学習と異文化交流の充実したセミナーとなりました。



学長室に中島實学長を訪ねた
オックスブリッジ英語サマースクールの講師
(ウィル・テイラーさんとリサ・ケイブさん)

第20期ケント大学英語研修プログラム報告



修了式でケント大学の先生方とともに記念撮影

ケント大学は、本学園と1993年に姉妹校提携協定を結び、ハワイ大学に次ぐ国際交流の実績があります。今回の語学研修(2013年8月3日から3週間)は、20回目の実施となり、13名の学生が参加しました。この研修は、英語力の向上とイギリスの文化及び歴史の学習、そしてプレゼンテーション力の強化を目的としています。

課外授業では、事前学習を受けた後に、カンタベリー大聖堂、リーズ城、ロンドン・シェイクスピア・グローブ座の見学をして、知識を深めました。

プログラム後半には、ペアで決めたテーマについて、現地の人々に対するインタビューを生かした調査結果をまとめ、最終日は、英語によるプレゼンテーションを行いました。

同研修に参加していた他の日本の大学と合同で、日本文化体験イベント 'Taste of Japan' を実施しました。本学の学生はダンスと盆踊りを披露し、各国からの留学生やケント大学教職員の皆様にも踊りに参加してもらいました。茶道・書道・折り紙などの体験ブースも設け、イベントは大盛況のうちに終わりました。

短期間の研修とはいえ、参加学生からは、「英語のコミュニケーション力が向上した」「異文化理解が深まった」といったコメントが多く聞かれ、研修の成果を実感していました。



観光で訪れたドーバー城

ローターアクトクラブの学生がロータリークラブの新世代交換プログラムに参加

国際ロータリー2680地区主催の「新世代交換プログラム」に、神戸須磨ロータリークラブの推薦を受けて、神戸女子大学のローターアクトクラブのメンバーである文学部 英語英米文学科3年生の森本 翔子さんが派遣生に選ばれました。2013年8月23日から9月14日の約3週間にアメリカのオハイオ州にあるコロンバスの教育機関でインターンシップ体験をしました。

また、数あるオハイオの大学の中でも最大規模のオハイオ州立大学を訪問しました。ロータリークラブのご招待で例会にも参加したり、各国のロータリークラブから来た留学生たちとも交流をもちました。インターンシップ中は、ロータリークラブのお宅でホームステイを体験し、アメリカ生活を満喫しました。

英語の教員を目指している森本さんは、このプログラムに参加して、幅広い知識をもって児童・生徒にフレンドリーに接している教員の姿が特に印象に残り、今後の学習への意欲が高まりました。ホストファミリーの方々や家族団らんの時間を毎日とても大切にしている姿に心暖まる思いで滞在できたことに感謝し、この体験をローターアクトクラブの活動に役立てる決意をしました。



コロンバスロータリークラブの例会に参加し
バナーを渡す森本翔子さん